

追浜あんず通信

Oppama Anzu Press

第11号 2016年3月 発行:特定非営利活動法人 アクションおっぱま

変化の年

昨年より、変化の兆し、あるいは変化を促す動きが見えてきました。一つは貝山地下壕です。

東日本大震災以降入壕が許可されませんでした。地盤工学会の調査報告書、横須賀製鉄所（造船所）創設 150 周年記念の講演会を経て、11 月の市長と追浜地域運営協議会との車座会議で、安全確認と必要な整備を行った後の公開方針が表明されました。地元との協議、協力のもとということも示されています。もう一つは、ワインの地名表示です。日本産の原料が 85%以上でなければ、産地、醸造地、品種も表示できないというもので、輸入果汁を原料とする「横須賀おっぱまワイン」には厳しい内容です。しかも、地域に支えられているおっぱまワインにとって、地名は単なる地名以上の意味を持つものであり、施行までの間に何とか残す方策を見つけないと困ります。醸造開始から 10 年のお祝い気分も吹っ飛ぶ出来事ですが、新しい展開を考えるべき時が来たという兆しなのかも知れません。

2015 年は変化の予兆の年でした。2016 年はこれらを見据えて、変化に向かって行く年になるでしょう。

(NPO アクションおっぱま理事長 昌子 住江)

● 追浜 空き家プロジェクト 第 2 弾

追浜 2 丁目のシェアハウスに続き、第 2 弾となる空き家の改修工事が進行中です。追浜南町の築 70 年以上の平屋（良心寺所有）を「KGU 空き家プロジェクト」の活動拠点にリノベーションする計画で、4 月のオープンを目指し、目下学生達が奮闘しています。「KGU 空き家プロジェクト」は、空き家を地域の資源とみなして、それを有効活用しながら、学生の視点で地域をより楽しく豊かにすることを目指すプロジェクトです。追浜が主な活動エリアで、学生達にとって、空き家のリノベーション、まちづくり、コミュニティづくりなど、実在するまちの中で実践しながら学ぶ貴重な機会です。大学での知識と地域での実践を通じて、地域に貢献しようとする人材がどんどん巣立っていくこ

と、追浜がより楽しく豊かなまちになることを願っています。

(関東学院大学人間環境学部

人間環境デザイン学科 准教授 兼子朋也)



空き家プロジェクトⅢ - 学生の声 -

第8号から紹介させていただいている「追浜空き家プロジェクト」。昨年12月中旬から、ついに2件目の改修が始まりました。2件目は南町にあり、築70年以上経過したものだと推測しております。そのため、家の基礎がだいぶ痛んでいました。そこで、工務店さんのお力も借り、基礎を修復しました。今後、畳に掘ごたつができ、外には広いデッキを作る予定です。プロジェクトの活動拠点、また地域交流の場として利用し、今以上に追浜の方々や学生の交流が深まったと考えております。また、昨年に

続き、追浜ナイトバザールや餅つき、今年は追浜新年会にも参加させていただきました。いつも温かく迎えてくださり、うれしい限りです。プロジェクトも人数が増え大きくなっているので、今年もたくさん地域の方と交流できたらと思います。

(関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科3年 田子香純)



鷹取山の清掃活動について (福島仁さんのインタビュー)

鷹取山の清掃活動を始めたのは5年くらい前からである。ちょうど追浜行政センターに青木さん(現NPOアクションおっぱま副理事長)が館長にきたころに始めた。始めたきっかけは鷹取山が荒れてきて、登山愛好家の練習場として有名であったがまわりの景色はすっかり変わってしまった。宅地開発も押し寄せ高い木も生え放題になってしまっていた。

清掃活動は二つの山岳会と地元の町内会で始めた。土地は横須賀市と稜線は逗子市との両方の所有である。観光課の方では高い木はボランティアでは危ないと止められている。活動の母体は追浜観光協会である。一年に一度秋に50人くらいで清掃を始めた。今は30人くらいの参加である。あまりかっちりした組織でなく気楽にやろうよということで連絡を取り9時から11時まで清掃活動を行っている。男性がほとんどで女の人は3人くらい。全員山には慣れている人で枝払いや蔓の撤去などを行っている。上からぶら下がって落としている。課題はなかなか進まないというところで同じところを毎年やっている。

行政や観光協会はあまり危険なことはやって欲しくないという制限がある。一方で業者に頼んで切る話もなかなかやってくれない。足場を組んだりおおがかりになる。山岳会の人たちは慣れているのでどんどんやるのだが。

(最近オリンピックにも取り上げられ高校生なども競技をしている。女の子で強い選手がいる。女性の方が柔軟なので強いのだと思う。)

登山道が最近つながっていない問題がある。

そのようなことも関係して案内地図がないのも問題かと思う。最近山岳会の講習などに使う場合がある。その時のロープが放置され他の場所に移動する必要がある。そのロープを子どもが登って危ないことがある。山岳会に届けをしてから登るように陳情があった。山岳会は若い人が多いが最近高齢者などが増えてきている。また外国人もいる。町内はあまり詳しくないが高齢化していると思う。

ハーケンを打ったままでよいのだが簡単に抜けるハーケンで残さざるを得ないものが問題である。普通は10~20センチくらいはうちこんである。また一人でやっている人もいる。ヘルメットをかぶらない人もいる。(でもその人は上手な人で落ちないが。)見本としては困る。やはり落ちる人もいる。いろいろな利用法で今のところ規約がない。

このように少しずついろいろな変化もあるが清掃活動は継続していきたい。現在も自分は一週間に一度くらいはいつている。活動を続けていくには500円くらい集めて懇親会くらいはやった方がよいのではないかと考えている。また予算もお願いしたいところである。

(NPOアクションおっぱま理事 吉田洋子記録)



● 富岡製糸場に追浜連合町内会の管外視察研修参加 (2015年10月)

富岡製糸場建築物には、横須賀造船所刻印の残る赤レンガが発見され、また、横須賀製鉄所の副首長ティボディエ官舎の「木骨レンガ造り」や「屋根のトラスト工法」が使用され、フランス人のバスチャンが共に設計したもので、横須賀がルーツと分かりました。

兄貴分の横須賀製鉄所（造船所）は、慶応元年に「鋳入れ」がされ、2015年11月の製鉄所開設150周年記念式典で深い縁から富岡市と友好市の締結がされ、共に日本近代化の礎と言われています。

時代は遡り米国ペリー提督は、嘉永6年（1853）軍艦4隻で国書を携え浦賀沖に来航し、開国を迫りました。

時の勘定奉行小栗上野介忠順（ただまさ）は、日米修好通商条約の批准にアメリカに渡り、ワシントン海軍造船所を見学しました。ここは造船だけでなく、製鉄を基盤とするあらゆる部品・工具を製造している総合工場であることに驚きました。

そこで幕府は外国の脅威から国を守るため、日本も海軍力増強に造船所が必要と考え、フランスのツーロン港に似た横須賀を建設場所を選び、小栗上野介が計画を立て、フランスのナポレオン3世の協力で、若手の造船技術者フラン

ソワ・レオンス・ヴェルニーが設計を担当しました。

当時のフランスは、製糸業の蚕に伝染病が発生し全滅の危機にさらされ、伝染病に強い日本の生糸と蚕がどうしても必要でした。

駐日フランス公使ロッシュは、幕府に接近を図り東洋進出の足掛かりにしました。

一方、富岡製糸場は、フランス人ブリュナが雇われ300釜の設置に始まり、フランスより熟練製糸工女も呼ばれ、日本人工女達に製糸技術を厳しく教え、日本初の規律ある女性工場労働者が誕生しました。



横須賀と富岡の両市は、日本の富国強兵を支える重要な役割を果たし、友好市となった今日、課題も含め増々身近な存在になりました。

NHKに登場する初代群馬県令「楫取元彦」の県庁大河ドラマ館や、世界遺産「富岡製糸場」を県ぐるみで観光や街づくりに活用し、横須賀も見習いたいものです。

(NPOアクションおっぱま副理事長 青木 猛)

● 映画による地域活性化

NPO法人ワップフィルム（東京都大田区）は第1作映画「商店街な人」に続き映画「未来シャッター」を製作しました。この映画は制作段階から多様な地域の地域パーソンを巻き込み、出演、ロケ地提供、寄付などの協力により作り上げられ、2015年6月に完成。上映方法も拘り、映画の後に皆で対話をして、行動アクションに繋げる「フューチャーセッション」を開催し、協働で地域課題を解決する場づくりを

しています。様々な課題に対して多様な人が語りあい、新しい視点で未来ビジョンを描き、行動に移していく、現在「自主上映イベント」主催者を募集しています。

(正会員 (株)アロマインデリア代表 菊地真紀子)



空家をリノベーションしたキネマフューチャーセンターで撮影



フライヤー裏モノづくり、商店街、交通機関、地域金融などのキーパーソンが本人役で出演

● ら・ぶ・いん おっぱま ● 追浜商盛会 織田会長

町ゼミは追浜で可能？

NPOの活動に課題のある町ゼミの実施は追浜でできるのだろうか、街づくりの役割がはたせないか、年度事業の議題に幾度か上がりました。可能性を考えるため、追浜商盛会の織田会長にお話を伺いました。以前、商工会議所の肝いりで追浜の商店街でも取り組もうとしたことがあるが、実現はできなかったとのことでした。その理由としては、店舗のスペースで対応出来ない店があり、ほかの会場を借用すると人手の問題が生ずるというジレンマがあるようです。

今後、街ゼミを実現するためには、ある程度の数の参加店舗を募る必要があります、そのためには各商店街同志が実現する意欲を持つことが必

須です。あるいは、NPOの立場で必要な店舗をチョイスする形で行うことも可能だと思います。

追浜の商店街に限らず、「シャッター通り」という迷惑な呼び方も抵抗なく受け取ってしまう現実があります。織田会長も十分現実を熟知しているが、何とかこの商店街を活性化する方向を見出すためいろいろ考えていらっしゃるようで、現状からの脱却のために何が必要かどうかすれば良いか等熱くお話ししていただきました。

今後もNPOアクションおっぱまも、商盛会と協力して追浜の街づくりや商店の活性化、追浜の将来を一緒に考えていくことを約束して、短時間ではありましたがインタビューを終えることができました。

織田会長、ありがとうございました。

(NPOアクションおっぱま理事 河村啓子 記)

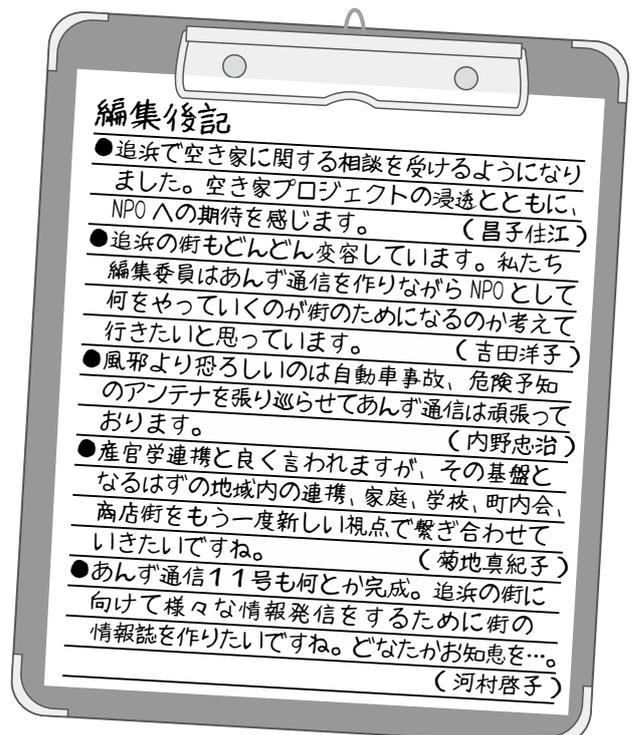
● さくら茶屋見学

2015年9月28日に追浜空き家プロジェクトの一貫で学生二人と河村さん私でさくら茶屋にいつてきました。金沢文庫駅から中の山道？を通過して登って行きました。西柴団地においては高齢化が進み、子どもが巣立って老夫婦二人や一人暮らしの方も増えてきたのでそのための拠点として空き店舗を活用して2010年に運営を始めたものです。地域の人たちが気軽に食事をしながらおしゃべりをしたり、多世代の交流ができる場所になっています。また同じ商店街の中にさらに二つの拠点もできていました。さくらカフェとほっとサロンです。さくら茶屋西柴で食事をしていたらNPO法人の理事長の岡本さんが来られて少し話をしました。追浜でも空き家活用プロジェクトが動いていて学生はそのメンバーということで紹介もしました。若い人が入ると元気がでるといった話などをしました。また新しいプロジェクトの打ち合わせとかですぐ出かけられましたが…

ここの西柴のように郊外住宅地の変容は本当に激しいです。自分たちで活性化をしている住宅地も増えていますが建築協定などの環境維持

の問題と空き家や空き店舗活用をどうバランスさせていくのかはこれから大きな課題になっていると思います。地域の中での建築協定だけでなく場合によっては用途地域の問題にも発展しそうです。住宅だけの純化用途で今後の郊外住宅地は持つのか。ボランティアだけで住宅地の維持ができていくのか。コミュニティビジネスなど若い人の発想が生まれてくるきざしはないのか。いろいろなことを考えた日でした。

(NPO法人アクションおっぱま理事 吉田洋子)



追浜あんず通信 11号 2016年3月発行

発行 特定非営利活動法人アクションおっぱま
発行人 昌子住江
編集 NPO法人アクションおっぱま編集委員会